

PROLOGUE

木二中 学校だより No.17 令和6年9月11日
校長 山元 竜二

木更津市立木更津第二中学校
〒292-0801 千葉県木更津市請西941番地
☎0438(36)2280 FAX0438(36)2233

E-mail:kisarazu2-j@kisarazu.ed.jp
<https://www.fureai-cloud.jp/kisa-kisarazu2-j>



「夢なき者に成功なし」 読書のススメ ～校長先生の書斎から～

明日12日(木)から14日(土)、3年生とともに2泊3日の修学旅行に行ってきます。木二中の修学旅行は流行(はやり)にのることなく古(いにしえ)の都、奈良・京都を巡る王道の旅。修学旅行のしおりにも記載しましたが、歴史的・文化的価値の高い神社仏閣を巡る旅行は中学生のみんなにとっては少し堅苦しいものかもしれないけど、かつて(794年以降)その地に都(日本の首都＝平安京)が置かれた日本の中心地を巡る旅なんて、まさに「The 修学旅行」であると考えます。教科書に載っていた、あるいは授業で習った、何となく聞いたことがあるといった歴史的建造物・文化財を自らの眼で見て、肌で感じて自身の見聞を広めてほしいと思います。

さて、冒頭の「夢なき者に成功なし」という名言を残した偉人が誰なのか、木二中生にわかる人がいるかな？奈良・京都の旅とはまったく関係はないとは言えないけれど、私は新幹線の行き帰りの車中でこの名言を残した偉人に関わる書籍を読もうと思っています。

「夢なき者に成功なし」、この言葉を残したのは、幕末動乱の時代に生を受け、私塾「松下(まつもと)村塾」を開き、後の明治維新で重要な働きをする多くの若者に思想的影響を与えた人物、吉田松陰(よしだしよういん)です。

江戸幕府が崩壊する幕末から明治という新しい時代への転換期に登場する人物については、中学校社会(歴史)の授業でも学習する内容ですね。西郷隆盛、大久保利通、高杉晋作、勝海舟、伊藤博文、みんなも一度は耳にしたことがある人物ではないでしょうか。時代こそ違えど、平成から令和という新しい時代の転換期、変化の激しい、予測不可能な時代…、なんだか共通点を感じずにはいられないのは私だけでしょうか…？

吉田松陰は、江戸幕府の大老、井伊直弼(いいなおすけ)によって処刑され(安政の大獄)、30歳という若さでその生涯を閉じました。時代は鎖国、海外渡航をすれば死刑になる1854年に、ペリー率いる黒船にたった一人、荒波を越えて乗り込もうとしました。その理由、「黒船の大砲を目にして、外国のやり方を学んだ方がよい。」と考えたから。(吉田松陰は兵法の専門家)

ペリー一行が鎖国下の日本にやってきて(1853年)、大砲3発の威嚇発射、圧倒的な技術力の差に意気消沈していた江戸の中にあっただけ一人、「西洋を追い抜こう」、「西洋を倒そう」と意気込んでいたのが若干25歳の吉田松陰だったのだそう。黒船の甲板に乗り込もうとして失敗した吉田松陰は、次のように言い残しています。

「今ここで海を渡ることが禁じられているのは、たかだか江戸の250年の常識に過ぎないが、今回の事件は、日本の今後3000年の歴史に関わることだ。くだらない常識に縛られ、日本が沈むのを傍観することは我慢ならなかった。」

吉田松陰は密航で逮捕、投獄。牢獄で出会った様々な囚人たちを弟子にし、仮釈放後松下村という小さな村で塾を開きます。これが後に伝説となった「松下村塾」。松下村塾を開いた期間はたったの2年半だったにもかかわらず、結果としてその松下村塾から総理大臣2名、国務大臣7名、大学の創設者2名という数多くのエリートを輩出。その代表的な門下生が、高杉晋作や伊藤博文。幕府への反乱により、吉田松陰は処刑されてしまいますが、その教え子たちが吉田松陰の遺志を受け継ぎ、「明治維新」という大きな時代のうねりを生み出すことになる…。

吉田松陰は、安政の大獄にて処刑される前に、門下生である高杉晋作に次のような言葉を送っています。

「死して不朽の見込あればいつでも死ぬべし。生きて大業の見込あればいつまでも生くべし。」

(死んでも朽ちることはない、という見込みがあれば、いつでも(国家社会のために)身を投げ出すべきである。生きて大きな仕事をなし遂げる見込みがあれば、いつまでも生き永らえるべきである。)

なんて潔く、深い言葉なのだろう…と思いませんか？吉田松陰の志が多くの教え子たちに引き継がれ、時代が大きく動いていく。そして大政奉還が行われたのが江戸城ではなく京都の二条城だった…。

私はこの修学旅行で二条城に足を運んでみようと考えています。(数班が二条城に行く計画があるとか)

私は吉田松陰にはなれませんが、木更津二中が数多くの優秀な卒業生を輩出する令和の松下村塾でありたい…と思いを馳せる今日この頃です。

参考文献：池田貴将著「覚悟の磨き方」～不安と生きるか 理想に死ぬか～超訳 吉田松陰